

みえる？ みえない？

山本 俊幸

臨床像を表現する際に「～様外観」という言葉がよく使われる。身近な例をあげると、比較的よくみる良性腫瘍に石灰化上皮腫がある。この臨床像の表現の仕方が、水疱様(bullous)外観、肉芽腫様(granulomatous)外観、萎縮性(atrophic)外観、弛緩性(anetodermic)外観、ケロイド様(keloidal)外観など、たくさんある。これらのうち、水疱様外観は全然水疱様にみえないと昔から思ってきた。弛緩してはみえるのだが、被覆表皮が厚いので水が溜まっているようにはどうも思えなかった。若いころはそうみえない自分の経験が足りないと思っていたが、皮膚科医になって30年以上たったいまでも、やはりみえないものはみえないと感じる。

これらは、先人がそのようにいっているから、とか、すでにそのような名称で呼ばれているからという理由であてはめているだけだと思う。自分ではそうみえないが、こういう症例をこう呼ぶといわれているので、つまり、こういうものはこういう呼び方をするのだという認識がすでに頭の中に入っているのです。自分の目で本当にそうみえるか確認しないまま病名をつけ、さらに若い人に押し付け(?)学会発表させる、などの例も少なからずあろう。本当に納得してそう呼んでいるのならよいが、決して無理にあてはめる必要はないのではと思う。一方で、たまたま少し前の教室カンファランスでのことだが、ちょうどそのような写真が出されたので、実際にその症例をみた若手に本当に水疱にみえたか聞いたら、意外にも「みえました」という答えが返ってきた。答えたのはまだあまり邪念のない(石灰化上皮腫で水疱様外観といういい方があるのを知らない?)学年だったので、真皮内の腫瘍の位置や被覆表皮との間の距離、表皮の厚さなどによっても見え方が異なるのかもしれない。

また、乾癬様という言葉は、臨床像、病理組織像を表現する際にどちらも使われる。一方、苔癬様という用語は病理組織像を表現する際に使われる。「苔癬様外観を呈した～」という表現は用いられない。その理由は、扁平苔癬の臨床像が多彩であり、また乾癬ほど症例数が多くないため、扁平苔癬様といってもイメージが伝わりにくいからだと思う。

話は変わるが、学会発表の演題名で「～様外観」とつけるときは結構勇気が要る。つけた側にはそうみえてもほかの人にそうみえるとは限らない。フロアから手があがり「私にはそうみえませんでした」といわれるのはよくある光景である。「～様外観を呈した」といういい方を、「臨床的に～を疑った」といったほうが少し控えめないい方になろう。つまり前者は共通の認識が求められるのに対し、後者は(他人がどう思うかわからないが)自分はそう考えたというニュアンスがある。同じようなものでも、つけた人の思惑が入って面白い。